

竹田文明論ノート

東京大学 景観研究室
川添研究室

竹田文明論ノート

目次

はじめに - 竹田文明という視座から竹田を素描する -	- 2
1. 水と地形の秩序に由来する生きているシステム	- 4
稲作とともにある農業施設群	
稲作中心の歳時記	
田んぼのローカルルール	
2. 手のあとが重なる空間	- 14
水田に芽吹く商業都市	
阿蘇に生まれ、豊後を想う	
あちらこちらにトンネルぬけて	
3. 受け継がれる竹田の人格	- 22
竹田風情	
あなたの町の物語	
竹田の地脈を流れるものたち	
おわりに - 月のウサギ -	- 28
東大竹田研究の系譜	- 30

はじめに - 文明という視座^{しぎ}から竹田を素描する -

ああ、いつもの竹田だ。

この町を訪れるたびに、その思いを深くする。

たとえば、あまたの竹田^{せんてつ}の先哲たち、田能村竹田、滝廉太郎、廣瀬武夫、朝倉文夫・・・みな、現代を生きるぼくたちと同じような町の風景を眺め、同じような人たちと出会い、同じような情感をこの町から感じとっていたのではないか。そして50年後、100年後にここを訪れる人たちも、きっと同じように、町を眼下^{おかしようし}に岡城趾に立ち、あるいは棚田の脇を流れる井路の水音を聴きながら、「ああ、いつもの竹田だ」と感じているのではないだろうか。

こういう町、地域は、にわかには思い当たらない。希^き有^うな町である。

竹田の秘密。竹田を、ほかならぬ竹田ならしめているものの正体。

それはいったい、なんだろうか。

つい散歩したくなる風情のただよう町並みだとか、刈り入れどきの棚田に端正に居並ぶ掛稲の愛らしい風景といった表象だけでは、説明がつかない。そういう町ならば、ほかにもあるからである。

この小冊子で試みたのは、この町の深層をつかさどっている本質を、文明という視座から考察し、仮説的に素描してみることである。

*

一般に文明といえ、人々の営みに社会としての枠組みを与える諸制度や技術（政治・法律・産業など；ソフトウェア）と、地域・都市の骨格や時代の空間様式を規定する基盤施設およびそのシステム（インフラストラクチャー；ハードウェア）からなる。前者のソフトウェアは、文明が変われば容易につくり替えられるが、後者のハードウェアは土地に定着して築かれるがゆえに、文明をまたいで残ることがある。結論から言えば、その残りかたにこそ、先述したような印象を訪れる者に与える、竹田の秘密があるのではないか。

たとえば、郊外のいたるところで目にする井路。水は、ときに水路橋で上空を走り、ときに岩^{うが}を穿^くった隧道^{ずいどう}をくぐってあらわれる。そのネットワークは農村地域一帯にはりめぐらされ、全体像は一見して複雑かつ混沌としている。

しかし、もともと井路形成の原理は、きわめて単純である。水は、地形にしたがって高きから低きに流れ、順々に田に水を配る。有史以来変わらぬ水と地形の秩序。井路網とは、この水と地形の秩序を、人間が共同体として利用するために可視化したものにほかならない。古い井路、とくに近代以前の井路に着目して、その部分部分をながめれば、この水と地形の秩序が素直に浮かびあがって見えてくる。ネットワーク全体が混沌の印象をあたえるのは、これら中近世文明の残存としての井路のうえに、近代技術によって広域に展開した井路網が重なっているからである。

さらに竹田を特徴づけるのは、阿蘇の溶岩台地を水が削ってできた地形である。大地は、いたるところ細かく深い谷にえぐりとられ、無数に分断されている。ゆえに、近代以降の井路整備もほ場整備も、基本的に、個々に分断された土地のなかの部分的な改修にとどまらざるをえなかった。この地域の地形が、井路網の全体を近代的なネットワークにつくりかえることを阻^{はば}んだ、とも言える。つまり、竹田の農村地域を訪れるとき、われわれは、近現代の

技術によって部分的に改修がほどこされた中近世の文明基盤のうえに、現代のコミュニティが営まれている景観を、ながめているのである。

竹田の中心市街地の場合も、同じように考えることができる。

中世由来の山城の麓に築かれた近世の城下町。町割りはオリジナルの状態をほぼそのまま維持している。市街のおおきさも、四周を閉ざす崖ゆえに、その範囲をせまい盆地の内部に限定され、近世城下町としてのスケールを保ちつづけている。かりに、周囲が開発に容易な地形に囲まれていたならば、竹田はもっと広く合理的な近代都市に改造され、しかし近世の面影を失った、あまたある凡百ほんひやくの町と化していただろう。

そしておそらく、この地形と市街地の関係、そして近世にほどこされた町割りのほぼ完全な残存が、いまの竹田城下町に独自の風情を与え、竹田を竹田ならしめている最大の要因である。

たとえば、いわゆる伝統的建造物群保存地区とくらべれば、竹田の特徴がわかりやすい。伝建地区では、歴史的建物が実物として、かつ群としてまとまって残っていることが重要視される。保存エリア自体は、たいていの場合、町の全体から見ればごく一部であり、ときに、あたかも現代都市のなかに唐突に出現する歴史村のような印象を与える。

一方、竹田城下町がたたえる歴史的風情は、上記のような伝建地区とは一線を画する。建物は昔とすっかり違えども、ほぼ中近世のままの空間の構造や風景の構図や場所の意味が、随所にたちあらわれる。たとえば、通りや路地から見あげる山の端の月。その構図は、かつて岡藩士や町人が見ていた構図と、ほぼ同じである。そしておそらく、その月がまとめている情感も。

農村であれ城下町であれ、竹田という地域は全体として、中近世の文明基盤に部分的な改良の手を加えながら、近現代の生活を営んできた。ふつうは逆である。システムティックに改造され尽くした近現代的空間の一部に、点的に、あるいはかすかな痕跡こんせきとして、中世や近世の文明の基盤が残滓ざんしのごとく残るのが通例である。それらは、現代の文明生活とは切り離された遺構として在ることを、わずかにゆるされているにすぎない。

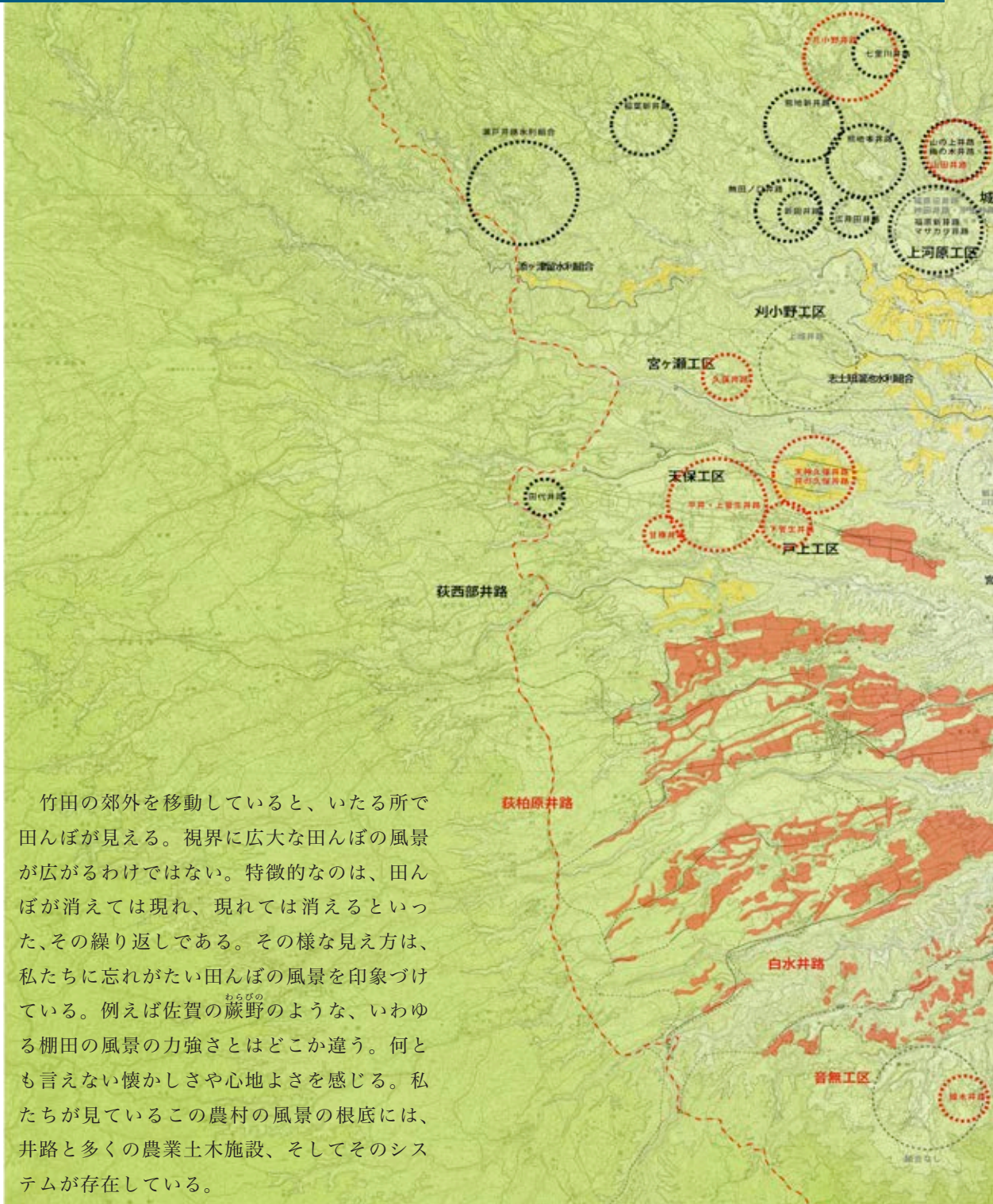
竹田の過去の文明基盤は、そのまま現代竹田人の日常に生きており、個々の身体感覚や共同体としての記憶を養う基層になっている。この町では、中世や近世から変わらぬであろう身体感覚と、現代人としてのそれとが、いたるところで交錯し、あるいは矛盾なく融合する。この感覚の経験は、それぞれの心に記憶として刻まれながら、時代を超えて、世代を超えて共有され、竹田は一貫してほかならぬ竹田でありつづける、という町としての同一性を保証している。

*

興味深い論点はまだある。たとえば、以上のような竹田の地域的特質が、竹田人の気質や共同体としての性格を、どのように規定しているのか。竹田の文明論は、必然的に、竹田の人間学に連鎖する。この町をさらに深く読み解く知的冒険として、今後に残しておきたい。まずは、わたしたち東京大学のメンバーが、四年半におよぶ竹田通いのなかで感じ、考えたことのひとまずの集成として、この小冊子をご笑覧しょうらんいただければさいわいである。

東京大学景観研究室 中井祐

1. 水と地形の秩序に由来する 生きているシステム



竹田の郊外を移動していると、いたる所で田んぼが見える。視界に広大な田んぼの風景が広がるわけではない。特徴的なのは、田んぼが消えては現れ、現れては消えるといった、その繰り返しである。その様な見え方は、私たちに忘れがたい田んぼの風景を印象づけている。例えば佐賀の^{わらびの}蕨野のような、いわゆる棚田の風景の力強さとはどこか違う。何とも言えない懐かしさや心地よさを感じる。私たちが見ているこの農村の風景の根底には、井路と多くの農業土木施設、そしてそのシステムが存在している。

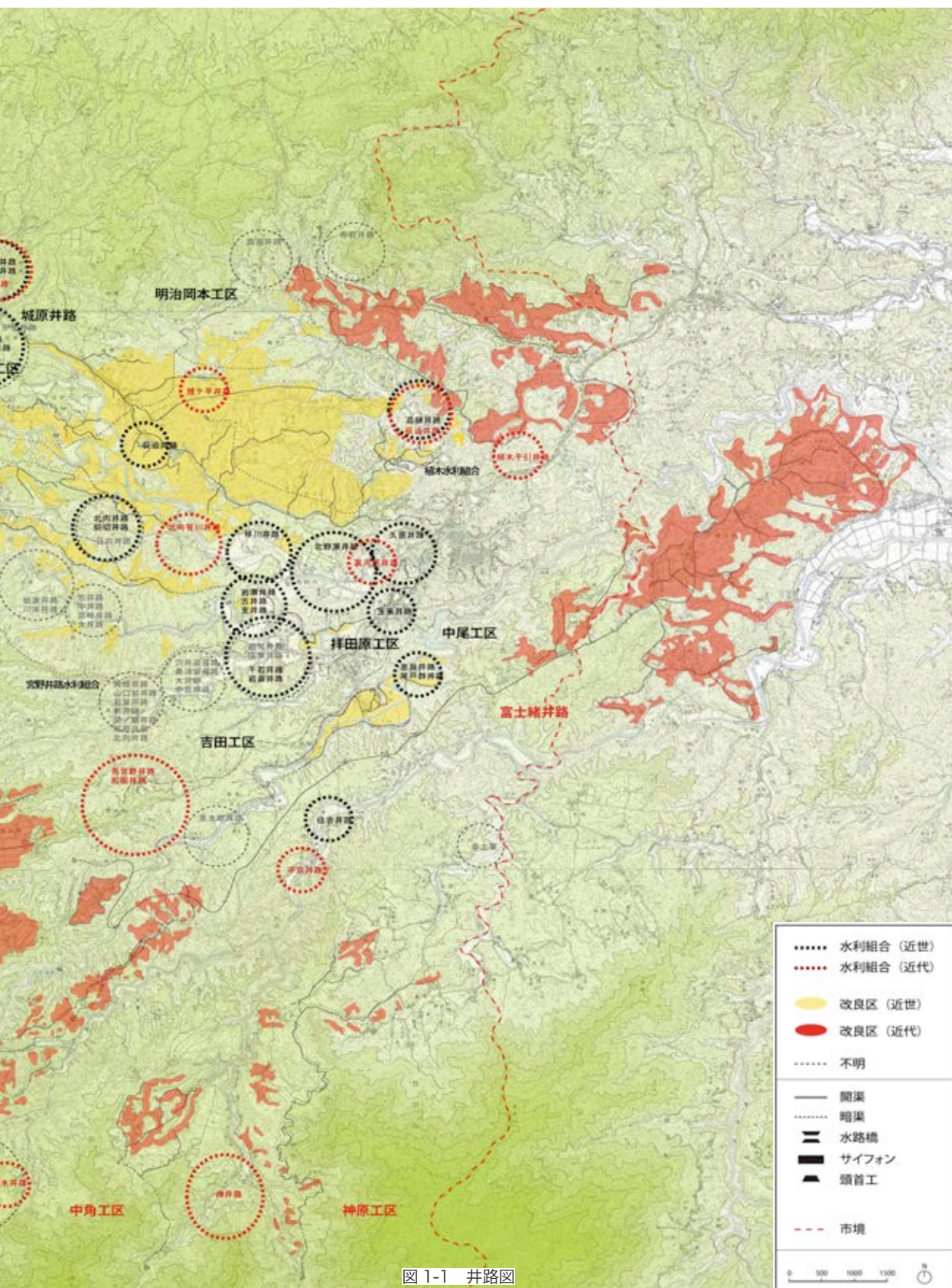


図 1-1 井路図

井路のシステムは、単体の系統で見れば、非常に素直な仕組みで出来ている。受益地^{じゅえき}よりも高い標高にある川を頭首工^{とうしゅこう}によって堰止め、井路に導水する。幹線-支線-孫線と、井路は順に分水施設を経由して枝分かれし、徐々に細くなっていく。基本的には高いところから、低いところへ。当たり前とも言える地形と水の流れの原理に従って、井路のシステムは出来ている。時には、その原理を超えて、水路橋やサイフォンが機能しているが、それは全体の傾向から言えば、近代以降に建設された一部に過ぎない。

単体では非常に素直なシステムであるが、このシステムの全容を把握しようとしたときに、状況は一変する。素直なシステムをその総体として見たとき、複雑で混沌したものに見えてくる。その理由は主に2つある。1つ目はその数である。研究で調べることができた井路とその共同体の数は101。これだけでも、多い数に思えるが、実際のところはこれを超える数の井路が存在していることが、研究の中で分かっている。この井路網は中近世の時点で文明基盤として概ね出来ており、近代技術が加わることで井路網がより広域に展開され、無数の井路から成る井路網として竹田中をまるで毛細血管の様に張り巡らすに至った。

2つ目は、そのシステムの範囲である。前述の通り、井路は素直なシステムでできているため、システムは、取水する川から受益^{じゅえき}する田んぼまでを1つのまとまった範囲とする。この範囲は、自治会や今の行政区域とも異なる。あるいは、富士緒井路や荻柏原井路のように竹田市域を越境するものもある。この範囲の食い違いは井路のシステムそのものが、水と地形に由来しているからこそである。加えて、この食い違いは共同体同士の関係性をより複雑化している。どこまでを総体

の範囲として考えるか、その線引きが非常に難しい。これら2点により、井路網の全容は複雑で混沌としたものとして見えてくる。

「近代化」とは複雑なシステムを、明快で系統だったシステムに組み直していく力が働く。ではなぜ、総体としては複雑で混沌とした状態を残しているのか、それは近代化の過程に答えがある。竹田の井路は近代化を果たさなかったか、そうではない。

ある1つの集落、もしくは1つの井路を取り出して近代化の過程を追っていくと、そこには農業そのものの近代化があり、ほ場整備という大きな近代化の力が加わる。ほ場整備によって、井路や田んぼのシステムは改変されていく。田んぼは集約され、それに併せて井路のシステムも改変される。しかしその改変は、基本的には井路単体の中での改変であって、全体からすれば部分的であると言える。中には一見簡素化された田んぼと井路も、その関係性を見れば複雑になっているケースもある。中近世をベースとした井路は、あくまで単体内部の部分的な近代的改変でしかない。全体のシステムは近代化を経てもなお大きくは改変されず、数や範囲も基本的には変わらずに、その複雑で混沌とした状態を残しているという事である。共同体の関係性を見ても、その複雑な状態は維持されている。

そのような状態を次のように言い換えた。中近世に出来た井路網の文明基盤は、かたちを少し変えながらも、未だに「生きている」状態にある。私たちはこの歴史の奥行きや「生きている」状態に、懐かしさや心地よさを感じているのではないだろうか。

生きている状態であり続けているのは、おそらく竹田の地形的特徴が大きく寄与している。竹田は阿蘇の溶岩台地が水によって削り

だされ、ヒダ状に深く開析^{かいせき}した地形をしており、空間は細く深い無数の谷によって分断されている。分断された空間の中で、竹田の井路の多くはこの地形と水の秩序に対して、素直に答えたシステムをしている。近代化も基本的にはこの分断された空間の中での出来事である。地形ゆえに、あるいは井路が地形と水の秩序に由来しているがゆえに、井路網全体のシステムは改変を拒んだ、とも考えられるのではないか。またその裏には、地形と水の秩序を守ってきた竹田人の意思を見ることがもできる。

部分的に近代的改変がなされた中近世の文明を基盤とした井路網、「地形と水の秩序に由来する生きているシステム」の「現れ」、としての農村風景を見ているのである。全容を把握するという行為は近代的思考である。しかし、竹田の井路網のシステムは、全体と部分のあてどなき解像を繰り返すことで、われわれが通常の近代的思考だけでは掬^{すく}いきれない有用な示唆^{しき}を与えてくれる。

(山田裕貴)

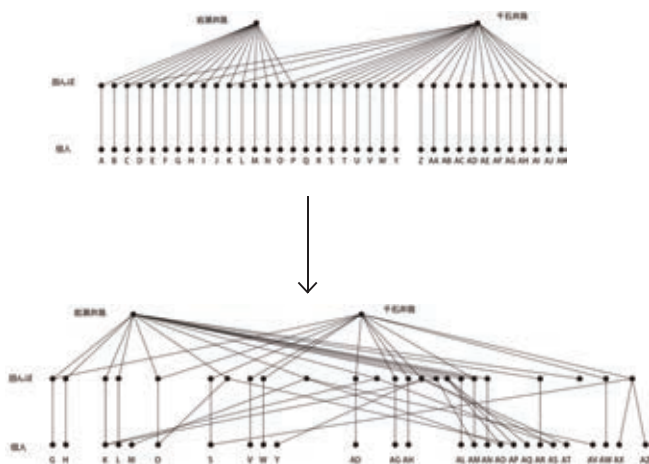


図 1-2 ほ場整備による井路と田んぼの関係性の変化

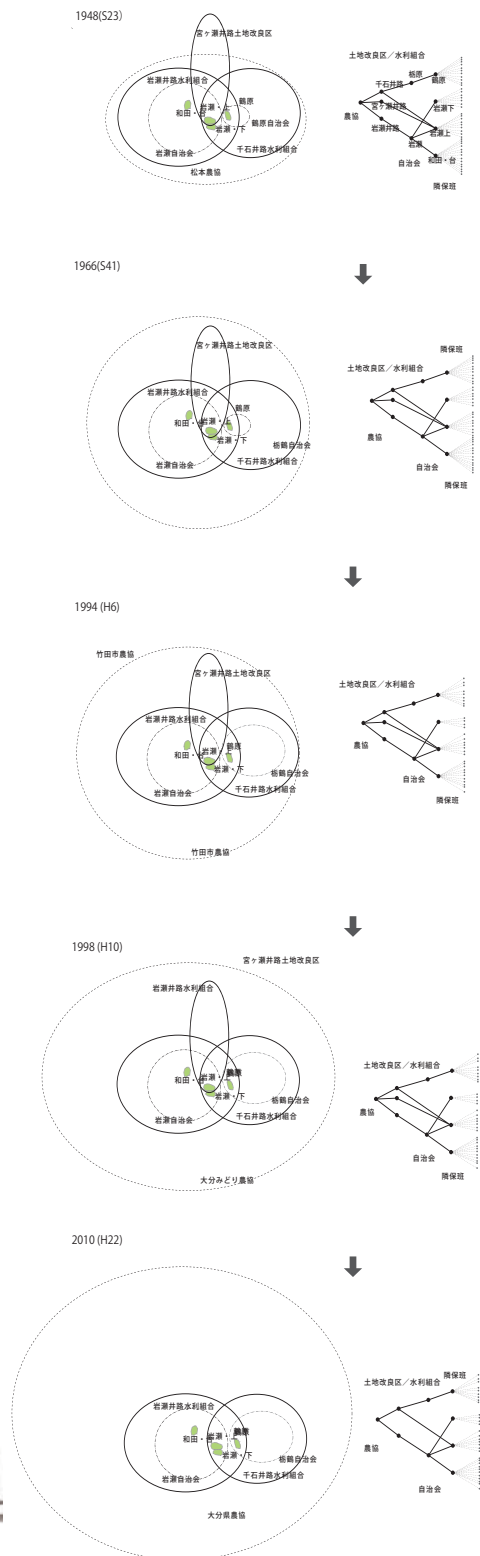


図 1-3 近代化による共同体の変容

稲作とともにある農業施設群



田んぼを少し離れて見ると、水が流れているのが目に入る。水は川から井路へ流れ、田んぼの稲まで届けられる。

井路より高い田んぼへは、水車が設けられていた。見上げる程の水車が続く道もあったという。

稲が生き生き育つため、田んぼには排水施設も備えられている。大雨の時には田んぼが水で溢れぬように、排水施設で門の開け閉めを行った。

近世の井路は平坦な地域を流れるもので、きゅうしん急峻なところでは取水地へ近接する地域のみが水を得られた。





近代技術はそれまで水を届けることが難しかった地域へも水を届けることを可能にした。水は高い山を越え、川も越えて、多くの地域を潤した。

白水ダムの溜池は、稲へ届ける水を留めるだけでなく、泳いだり、ボートを漕いだりと、地域の人々のレジャーの場としても愛された。

竹田の農村地域には自然風景の合間に多様な農業土木施設が存在する。





農村の暮らしを維持するためのたくさんの共同作業。

田植えはみんなで、掛け稲は家族で。井路や道の手入れも地域の仕事。みんなで井路(井手)、道普請みしんを行う。共同作業の後は一杯呑み。

「もう4時から一杯呑みじゃ。やから道普請みしんの時は朝から1日。帰りがけはいい気分になって帰りよった。」



一杯呑みはお祭り後にも行われた。例えば、井路の開鑿かいさくを記念し祝う水恩祭。このお祭りは地域によっては100年以上も続いている。

井路開鑿の記念日だけでなく、橋の完成を記念する祭りもある。

自然との関係の変化を記念して、そこに住むために協力し、人は生き生き暮らしている。

稲作中心の歳時記

田んぼのローカルルール



急峻な^{きゅうしゅん}山地で暮らすため、人は田んぼをつくっていった。

田んぼへ水を届けたのは、地形に合わせてできた井路(井手)。水を扱うことは難しく、昔は井路からしばしば漏水した。低地部分から湧き出た漏水はデミという名前で呼ばれていた。

そんな山地で生きるため、人はテマガシ、テマガエシしながら自然との約束事を守ってきた。

テマガシ、テマガエシとは共同作業の際の合言葉。「お世話する」という意味を持つ。

ほ場整備で大きな田んぼを作った時も、後でみんなに分割できるように、取水口と排水口を複数作った。

人と人との間にも、共に暮らすためのルールがある。

(高橋朋子)



参考文献

山田裕貴：竹田における農村景観の近代の変容と多層的共同体の関係性

竹本福子：農村集落における風景と生活史の変遷 - 大分県竹田市志土知地区を対象として -

2. 手のあとが重なる空間



図 2-1 岡城々下家中図 (天明 3 年) (1783)

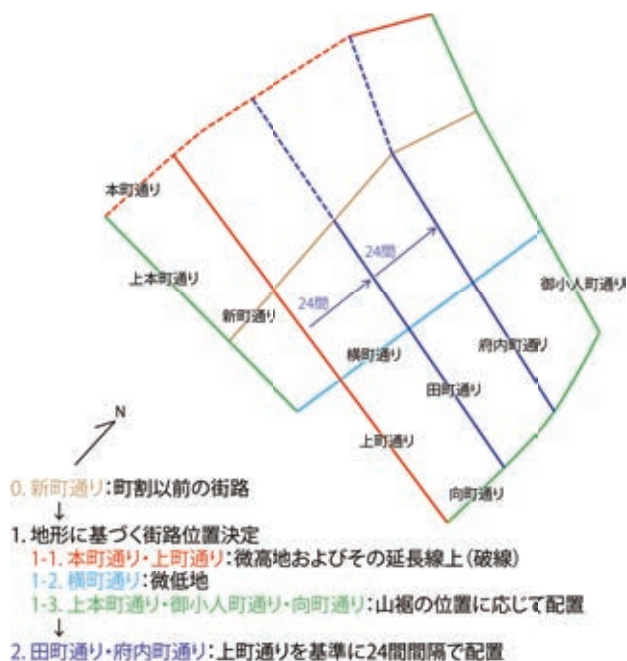


図 2-2 城下町設計原理



図 2-3 宅地の間口方向
(旧竹田市街圖に加筆)



図 2-4 水路網と流向
(總町繪圖面に加筆)

ある街にはじめて訪れたにも関わらず、ふと懐かしさや、安堵感を感じる時がある。それは、その場所に身を置いた時の空間体験によって、その街をつくってきた人々の【手のあと】や、その上で生きて来た人々によって育まれてきた【豊かなつながり】を、努力して意識する必要も無く、全身で感じる事ができるからではないだろうか。

竹田城下町の魅力の1つは、そのような【豊かなつながり】にこそあると考える。竹田を特徴づける地形と水の上に、1つ1つ長い時間をかけて、手で付け足していった竹田人の【手のあと】が、圧倒的な質感のつながりを

ともなって、訪れた人に直接的に働きかけているのではないかと思う。

地形を読んで敷設された道を歩くとき、水の流に素直に掘られた水路のせせらぎを眺め水音を聞くとき、その街を見守り続けた山々の視線を感じる時、街角の丁寧な設えにその場所で暮らす人々の息づかいを感じる時、それぞれの小さな手掛かりが、300年という時間的にも空間的にも非常に豊かなつながりの中にあることを感じる。そして、自分が今その一部になっていると実感し、受け入れられたと喜び、懐かしさや安堵を感じるのかもしれない。

では、城下町において感じられる【豊かなつながり】の正体とは何か。近世の都市システムが、この地に根付こうとした城下町建設時の様子を掘り下げること、先人達の自然との戦いの痕跡（脈々と続く土と水、人との関係）から考えていきたい。

城下町建設の場に選ばれたのは、稲葉川と凝灰岩の大地に囲まれ、2本の川が流れ込む水はけの悪い湿地帯であり、それ以前には周囲には農家が点在するのみであった。

城下町設計の過程を読み解くと、それまでこの地になかった近世の町割りを根付かせるため、地形の少しの高低差と水の流れを丁寧に読みながら、城下町の骨格をつくっていった先人達の様子が浮かび上がってくる。

城下町内でも比較的高い所を通る上町通りは町割りの基準となり、近世の都市構造と、この地の地形との接点となった。上町通りは町の高いところを、すっきりとまっすぐ通る道となり、岡城に続く参勤交代の大名行列が通る庶民が見上げる道となった。上町通りから、近世の都市構造からくる24間幅で田町通り、府内町通りが通される一方、外周を縁どった上本町通り、御小人町通り、向町通りなどは、隣接する山裾との関係から、地形に沿ったゆがんだ形をしている。また、低い土地を通り城下町内を流れる水路の流れが集まっている横町通り沿いには、間口を向ける家がほとんどなく、通り沿いに町が形成されなかった。このような通りのそれぞれの性格が、元の地形から規定され、その先につながっている外のものとの影響しあうという城下町の特徴は、明治以降トンネルによって囲まれた土地の内外がつながった後も続いている。

城下町形成後、町の拡大に向けたエネルギーと、囲まれた地形との葛藤の跡が色濃く積層したのが城下町の周縁部である。城下町の拡大は、古町の形成のように周囲の農地を取

り込んでいく形で始まったが、それには限度があった。寺町の寺院や御小人町の西光寺を町の外へ移転し、道を付け替えて敷地を増やし、囲まれた地形の中で手探りで人の住む場所を創り出してきた。町で見られる溶結凝灰岩の崖を削った跡などを見ると、その戦いの痕跡のようにすら思えてくる。そんな囲まれた地形と町の発展へのエネルギーが衝突してきたであろう町の周縁部には、これまで多くの芸術家が魅かれ、居を構えてきた。

小京都とも謳われる城下町の町割りがぼんやりと不整形なのは、一に平坦ではない地形と水の存在があり、二に碁盤目状の町割りを最大限に試みようとする、地形と拮抗するような人々の謀みがあったからである。今も残るそんな不整形な町割りの中では、地形や水、近世の都市構造、その後の時代の出来事の狭間で葛藤してきた先人達の【手のあと】が、囲われた中で集積しながら、訪れた人に語りかけてくる。【手のあと】だらけの整えられていない町割りは自然と人のつながりの歴史をそのまま伝え、今を生きる人達の矛盾を受け止め、これからの可能性を信じさせてくれる。

そんな城下町に育まれた人々は、竹田人として共有できるある感覚をもっているようにも感じる。竹田に生きる人々は、今日もそれを基底にしながら、これまで受け継いできた【豊かなつながり】に、自分たちの【手のあと】を少しずつ足して暮らしているのではないだろうか。

(福島秀哉)

参考文献

金井雄太：近世竹田における城下町設計の論理

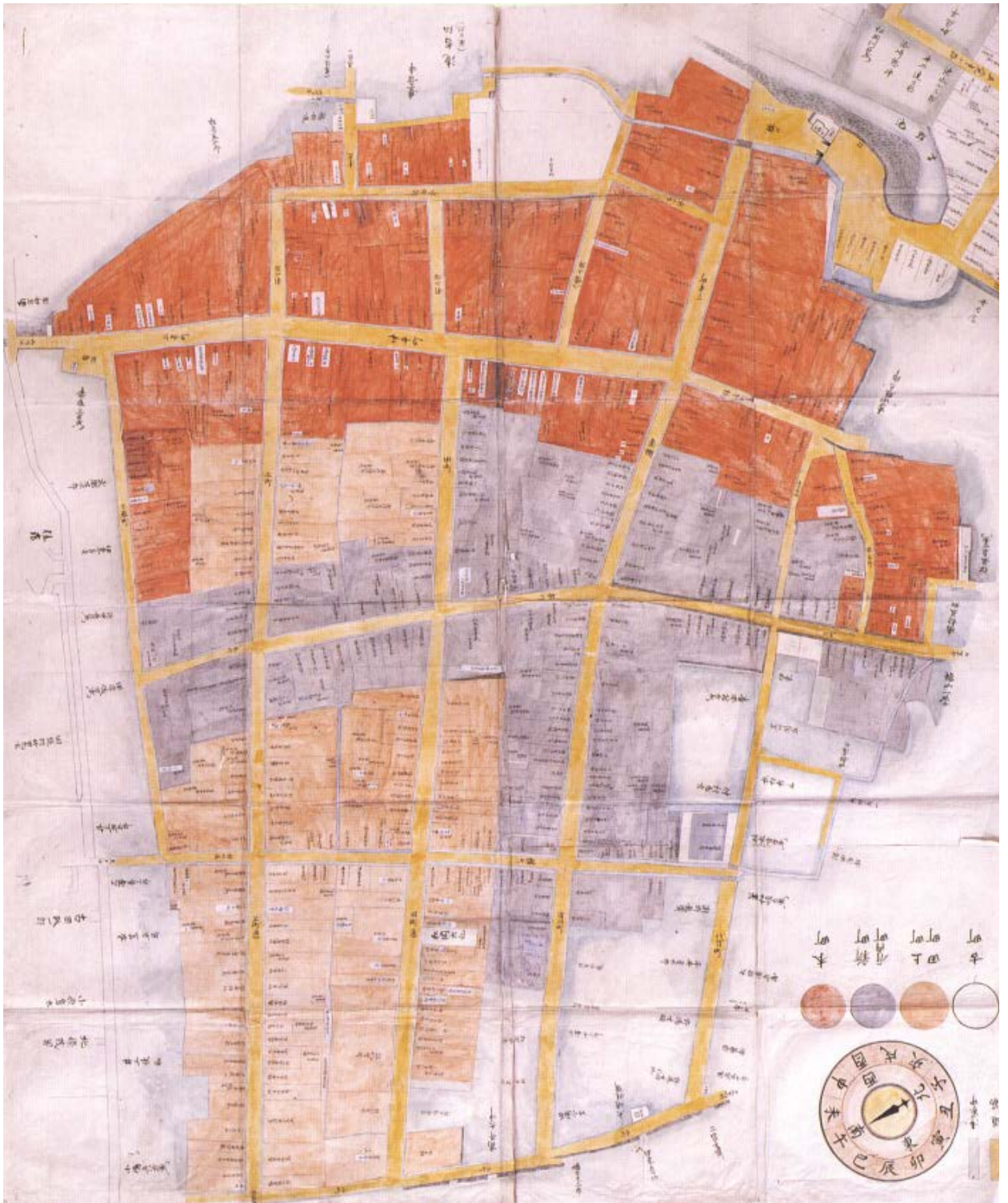


图 2-5 聰町繪圖面 (1869)

水田に芽吹く商業都市



かつてこの城下町には、南の台地から北の稲葉川へ、二つの小川¹が流れていたという。二本の川で潤った盆地²には、当然のように水田地帯が広がっていたし、その周りの山裾には、田園の恵みに暮らす農村があったはずである³。ところがどういわけか江戸時代には、既にこのささやかな盆は、近世的な町割と栄えある都としての美酒を受け入れた盃であった。水田には幾条の商人の町が刻まれ、周縁部に住まうのはもはや農民ではなく藩主に仕える武士であった⁴。

1594年、キリシタン大名としても知られる志賀氏⁵の治めていた岡城—通称、臥牛城⁶を引き継ぐ一族として、遠く播磨⁷より中川公がこの竹田の地に封ぜられた。国勢のうねりの中で近世の都市システムが、この田園地帯の麓に、あるとき突然もたらされたのだ。そしてこの新しい都市は、藩外から数々の商人たちを伴ってやってきた。

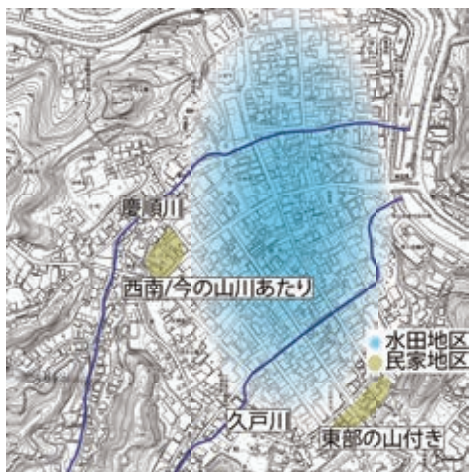


図 2-6 城下町形成以前の地形
(竹田市白図に加筆)



公民館での興行に周辺の村から人が集まった。

このときをもって、城下町と農村部（町部と郡部⁸⁾）の呼び分けが始まり、郡部の人々は城下町に農産品や工芸品を売り込み⁹⁾、町部からは農村の住人に外来の商品を提供するという相互の共益関係が生まれる。こうして、井路と稲穂の田園連なる竹田の丘陵部の生活にも、手頃で身近な「近世」が持ち込まれるようになった¹⁰⁾。

昔から、竹田を流れる水と城下町の酒蔵から出来た酒¹¹⁾を、皆が享受^{きやうじゆ}してきたし、今でも毎年夏休みになれば、城下町の三社に城原のおさがりで神様が降りてくる¹²⁾。農村部の子どもたちが片道二時間の自転車通学で竹田高校に通った、タクシーで城下町の幼稚園に通っている、という話も耳にした。

城下町が竹田の地に芽吹いて浅いが、住民同士の間関係によって、近世都市は農村の懐に根付いた。今ではこの両者のコミュニケーションが、竹田ならではの複合的に豊かな数々の文明の一端を担っているのではないだろうか。

¹ 【城下町地区には元々2本の川（慶順川、久戸川）が流れていた】現在の都市下水道八幡川、下町川の位置とほぼ一致している。

² 【城下町から山城（岡城）は見えない】盆地に位置する城下町からは岡城は見えない。高台にある岡城からは、城下町全体が一望できる。

³ 【士族の町（殿町、茶屋の辻）と町人地のエリア分けが残っていた】

⁴ 【農村部として周縁部に住戸が点在していた】中世以前、元々城下町の町割があるところは水田だった。

⁵ 【竹田は古くから切支丹との縁がある】切支丹大名で知られる大友宗麟に仕えた志賀親次は切支丹の妻を持ち、竹田と白杵を行き来する商人から切支丹について見聞するなどし、自身も切支丹となった。その領地には切支丹が多く、城下町内にもいくつか切支丹にまつわる史跡が残る。カモフラージュとしての稲荷神社も見られ、その例としてキリシタン洞窟礼拝堂の向いにある赤松稲荷神社が挙げられるということだ。ホウジョウカエツ通りは昭和40年頃には家がなかったが、現在では11戸の住戸が並ぶ。同じ通りにあるキリシタン洞窟礼拝堂はそれ以前の江戸時代から既にあつたという。- ヒアリング資料（早川和2012.10.17）より

⁶ 【今の城下町のウラに幻の城下町がある】中川氏入城以前の城下町は、城を挟んで今の城下町とは反対側の十川（そうかわ）、挾田地区にあり、志賀氏時代の町である。

【城下町周辺には、岡城以外にフルシロがある】竹田駅から3kmほどの騎牟礼城（古城、上鹿口辺り）はフルシロともよばれた。

騎牟礼城の他に、大分、宮崎、鹿児島にも牟礼のつく城が複数存在した。竹田市内では、騎牟礼城の他に津賀牟礼城、松牟礼城があり、いずれも山城。牟礼（ムレ）は山を表す朝鮮語由来と考えられている。

⁷ 兵庫県三木市。それ以前の中川家は、現大阪府茨木市の茨木城を治めていた。

⁸ 【町部⇔郡部の対比した呼び分け】江戸時代、竹田町以外に商店を開くことは禁じられており、城下町（町部）の商人は誇りをもって店を構えていた。商圏は宮崎の高千穂、熊本の高森、小国（いずれも約40km圏域）まで及んだ。

⁹ 【竹田町へ近郊からオナガシが野菜を売りに来た】平村、鹿口を中心に、片ヶ瀬、小高野などで作った野菜を町で売る近郊農業が町を支えていた。

【チリガミウリが庭先で塵紙を売っていた】町には塵紙売りも現れた。通りというより、玄関でなく前庭まで入り込んで、踏み石に腰を下ろして売り文句を言うこともあった。もちろん当時の塵紙といえば和紙だった。竹田において、和紙は特別な伝統工芸品というより、日常品として根付いていたが、数年前に最後の和紙職人がやめてしまい途絶えた。

¹⁰ 【玉来町から53軒の町家が移された】1600年頃のこと。

【バスは玉来行きが一番多かった（8本/日）】大正11年頃。玉来と城下町の生活上の結びつきが強いことを示している。これは、城下町造営の折に玉来から町屋を移して来たことと大いに関係しており、玉来の人々と城下町の人々は江戸時代以降も長い間、コミュニティ面で有機的につながりをもっているのだ。

¹¹ 【竹田の水と、町内で作られるお酒】日本酒「竹田櫻」は小早川酒造（上本町に現存）により竹田町内で造られていたが、昭和6年に久住に移り、今は緒方町の丹誠酒類により醸造。焼酎「豊後清明」は壹島酒造が竹田町内に設けた「福寿屋 岡城蒸溜所」において「名水百選」に選ばれた竹田湧水群の良質な水を使用して醸造。大分県では珍しく米麴を使った本格むぎ焼酎。

¹² 【毎年夏休みに神様が下りてくる】夏越祭りは、7月下旬の3日間、城原神社の神様が広瀬神社、岡神社、神明社、西宮社の各社に順番におりてくる行事で、「お下がり」ともよぶ。城原から神輿を運び、現在の駅前広場で担ぎ手が変わる。

- ヒアリング資料（橋爪愛子2012.10.13）より

阿蘇に生まれ、豊後を想う



阿蘇山系¹の東辺にもたらされた火砕流の爪痕とともに、文字通り日照時間の長い「明るい農村、竹田」は存在してきた。竹田の気候は、太平洋沿岸型の気候と、日本海沿岸型の気候との境目にある²。つまり竹田は、佐伯的でもあるし、湯布院的であるともいえる。なんとも奇妙な感覚を受けるが、竹田はそうした二重性を、偶然にも持ち合わせた土地柄だということであろう。

りゅうきゅうという刺身丼がある。沖縄県を連想させる名前である³が、大分の海沿いの漁師の食べ物である。海沿いでもない竹田でもこの料理が食べられるのは、城下町に魚を仕入れて来た歴史があるからだ。昔は白杵などから馬⁴で苦勞して運んで来たようだが、いつしか輸送手段は国鉄⁵に代わり、今ではトラックが国道⁶沿いに運んでくる。城下町に到着すると、鮮魚はうおんな(魚棚)と呼ばれてきた魚町⁷で提供される。このように、沿岸部との交流は古くから続けられてきたが、興味深いのは三佐との盟友的とも言えるつながりである。岡藩の玄関口⁸となる港として栄えた三佐⁹であるから、藩都である竹田城下町とはひとかたならぬつながりがあったのだろう。藍染堂や裁判所、警察署など、三佐大工¹⁰の手になる建物には見覚えのあるものばかりである。このように、脈々と続く豊後の人々の営みが、竹田に仮想的な太平洋をもたらしてきた。

山に封じられた中に、海をも引き寄せる。竹田の二重性がここにも現れている。

¹ 【竹田は阿蘇山系の町であり、火砕流による巨岩が町中に散在している】30万年前から9万年前にかけて4度噴火した阿蘇山の熔岩と火山灰の堆積地層のただ中に城下町が存在するため、町中に噴火したときの火砕流の名残が、無骨な巨岩として現れているのだ。

² 【昼夜の気温の差が大きい】年平均日較差は沿岸部は7~8度であるが竹田は10度である。一般的に盆地の底は昼間最も暖かく、夜間に最も冷え込む。大分県の中では比較的天気が良い、日照時間が年1900時間で県北西部の山地よりも20パーセント近く多い。竹田の盆地は特に冬季の天候が良い。

³ 【りゅうきゅう ひゅうが といった地名のつく大分郷土料理】りゅうきゅうは刺身丼(とくにひゅうがはマグロ丼)で、大分の海沿いの郷土料理であり、竹田でも食べられている。琉球、日向といった地名が一応の語源とされているが仔細は不詳である。

⁴ 【馬方が白杵から魚を運んでいた】馬体側面に竹籠をつるし、腐りやすい小魚は外側に、大きい魚は馬体側に詰めて、白杵から町に魚を運搬した。唄を歌いながら運んだという。馬方は農家の米も代行して売っていた。

⁵ 【大分-竹田間の鉄道開通】大正13年。豊肥線全線開通は昭和3年。当時は車道の状況が悪く魚が痛むことなどがあったため、列車で輸送することが多かった。

⁶ 大分-熊本間の県道(現国道57号線)はすでに、明治18年には開通していた。

⁷ 魚の店頭販売や、魚料理を提供する料亭があった。

⁸ 【長崎-竹田のルートは4つの陸路と1つの海路】江戸幕末にはこれら5つのルートが提示されている。かくれキリシタンらが遺した切支丹洞窟礼拝堂は、城下町の南東周縁の、広瀬神社が建っている台地と同じ台地の崖面を影像してつくられている。この礼拝堂の城下町に対する位置関係と、長崎-竹田間の陸路の位置とは関連があるかも知れない。

⁹ 【三佐は岡藩の玄関口と呼ばれていた】三佐も、岡藩の参勤交替の時の港として、お船手が栄えた。お船手が栄えるということは、船大工や船乗りが沢山住んでおり、武士として取り扱われた。三佐には水運に関係した技術の伝統がおそらく戦前までずっと続いていた。

¹⁰ 【三佐大工がつくった建物が城下町地区にいくつもある】明治初期、西南戦争からの再建にも三佐大工が関わっており、70軒近くを復建した。

【「飛騨の匠に竹田の番匠。」】神田の田植え雛子の一節「宮島様の御普請には、どなたか棟梁なされた 飛騨の匠に竹田の番匠、兩人棟梁なされた」とあり、竹田の大工は飛騨大工とともに名匠とされ、禁裡(天皇の住居)も手がけたという。愛染堂は、日光の造営に関係した飛騨の匠と、竹田番匠宗作御門によって協働された。

あちらこちらにトンネルぬけて

トンネルの内へ

トンネルを抜けた先は、雪国ではなかった¹。ここに突如として出現した瀟洒な街並みに、人々は皆、一様に驚く。

城下町に続く、七つのトンネルがあると聞く。かつて、阿蘇より途方なく永い悪道を超え、トンネルを抜けたある人にとって、城下町はまるで一つの別世界のように思われたという²。

それらのトンネルのいずれを見通しても、まず背景として現前するのは、人智を加えて少しずつ焦点を離れた、言語化による明解さを寄せ付けない、ぼんやりとした町割である。辿々しい町割はやがて成熟し、ついに際立った幾筋の通りの奥行きが動きだし、そのまま岩壁にトンネルを穿^{うが}った。トンネルは断続的な町割りから、断片的にシーンをくり抜いた³。それらは印象としてどこか異なるので、七つの情景が結ぶ像はあたかも「無限の拡がり」を有しているようである。



トンネルの外へ

七つのトンネルは、世界地図の七つの海のように、確固たる世界の外縁を規定している。竹田城下町もやはり一つの完結した世界なのである。さしずめ、城下町を内向きに閉じ込めている稲葉川や、背後の火砕流台地の山々は、自然の防波堤⁴であろうか。かつてこれらの境界に守られて、武家屋敷が並び、芸術家が大成し⁵、そして最後に町の人々によってトンネルが穿^{うが}られた。城下町よりつながるぼんやりとまぶしいトンネルのむこうがわにこそ、「無限の拡がり」の根源があるのだと、いまや誰の目にも明らかになった。

(李鹿路)

¹ 川端康成は2度竹田を訪れ、このときの取材をもとに、『波千鳥』の中の「旅の別離」「父の町」「荒城の月」を書いた。

² 【「レンコン町」と呼ばれるほどトンネルが多い】この土地では、火砕流台地の谷間を行き来するために、明治以降、トンネルがいくつも作られた。例えば会々から城下町に抜けるために、間を阻む台地には会々トンネルが穿たれているし、城下町から竹田高校のある鷹匠町に行くためにも火砕流台地を抜けるトンネルを通らなければいけない。したがって、竹田周辺にはこれら「ヌギ」（トンネル、隧道）と同時に「ダニ」（谷）が存在する。城下町地区に関係するトンネルは13カ所であるが、谷は四十八谷あり、内「タニ」はオクノタニしかなく、ほかは全て「ダニ」といわれた。トンネルはすべて明治期につくられている。昭和50年代ごろに城下町を車で訪れたある観光客が、曲がりくねった悪道の先のトンネルを抜けると突如として綺麗な街並が現れたため、今思い返すと「千と千尋の神隠し」の冒頭を思わせる感動的な出来事だった、と述懐している。

³ 【防衛上の理由から、城下町へのトンネルはなかった】竹田には隧道を掘削する技術がもともとあったようだが、明治以前はトンネルを掘る事が禁じられていた。当時は山沿いに町の内外を行き来していたと思われる。

⁴ 【城下町は稲葉川と凝灰岩の台地に囲まれる】コンパクトな領域性は、水と大地の双方を境界として包含する。また、岡城は山城であり、城下町の中心ではなく背後に控えている。

⁵ 【外縁部に芸術家が集まる】田能村竹田（画家）は殿町に、田島祝満子（歌人）は寺町に、片山はじめ（画家）は外縁部の図書館の上階に住んでいた。

3. 受け継がれる竹田の人格

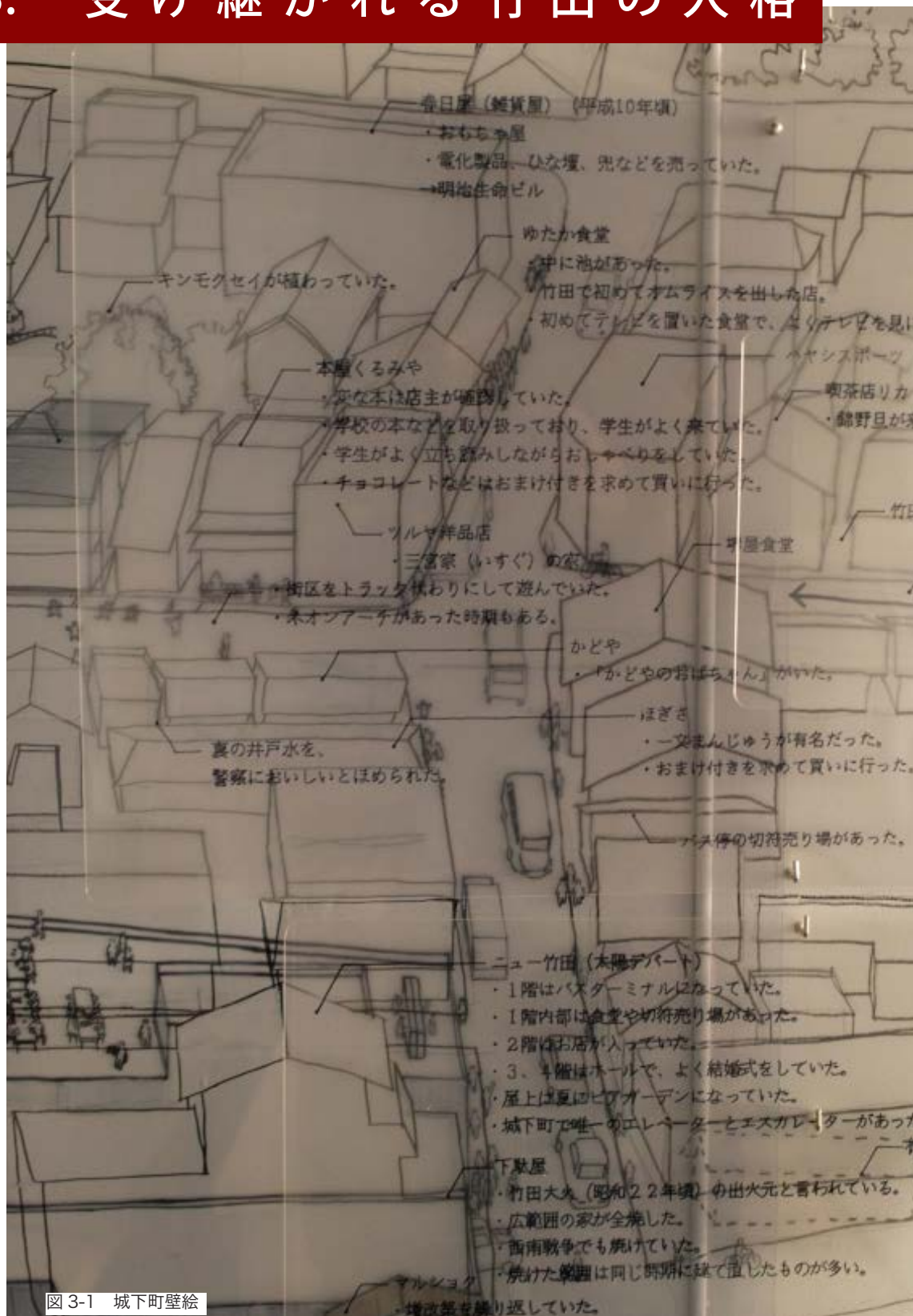
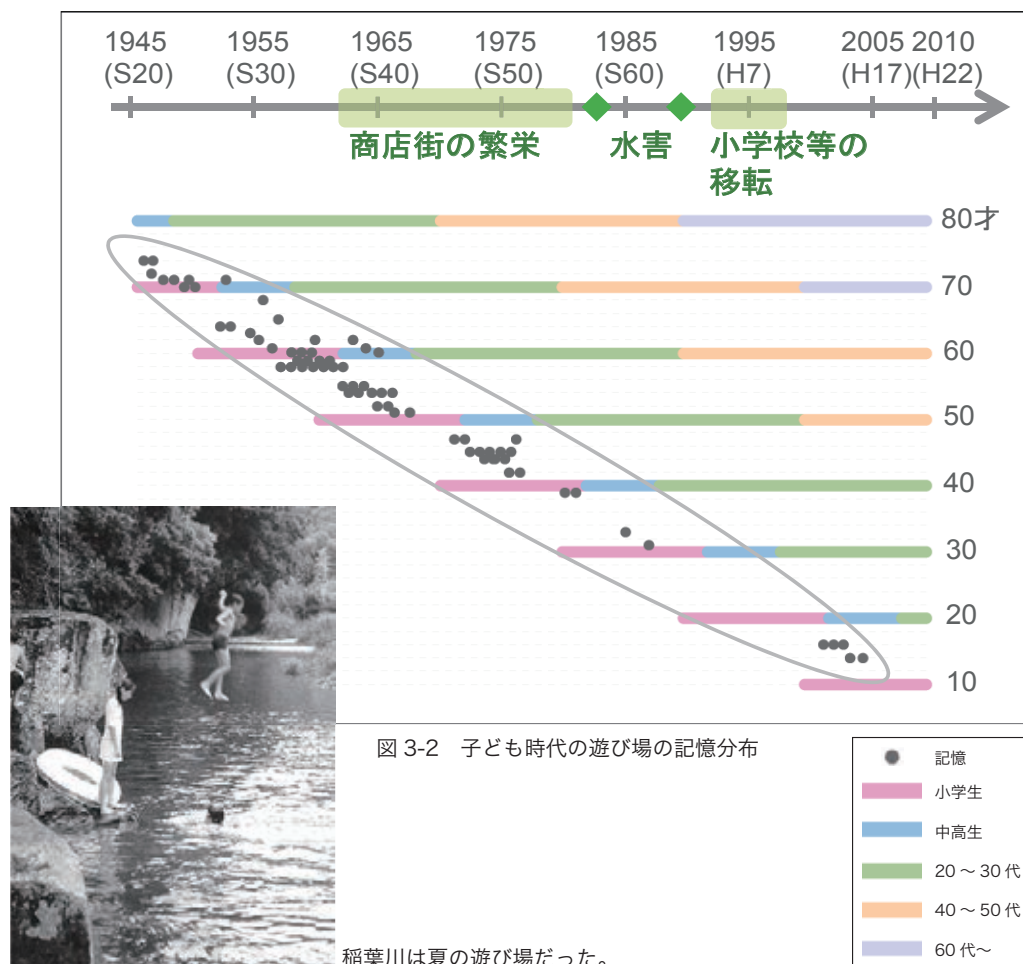


図 3-1 城下町壁絵

自分のいる場所が、過去と確実につながっていると感じられる場所、もうすこし簡単に言うと、自分、母、祖母、その何世代も前からの、ひとつの連続する時間の中で、今ここに自分が存在していると、実感をもつことのできる場所は、日本にはもうあまり残されていない。戦後、多くの若者は、よい収入の仕事求めて都市に移り、核家族とよばれる、親と子どもだけの世帯をつくり、高度経済成長という新しい時間の流れを生きてきた。その反対に、地方に残された、それまで脈々とつながってきた時間の流れは、伝える先がないままに、今やそのほとんどが消えようとしている。

しかし私たちが、竹田で出会った人々は、世代を超えた記憶を、自分たちのなかに色濃く残している。例えば「あそこにアーケードがあった」「祭りで象が練り歩いていた」「戦時中にこの漆喰を黒く塗った」という何十年前の記憶はもちろん、「岡城以外にも城がある」「キリシタン礼拝堂があそこにある」という百年以上前の記憶をさらにと語る人もいる。そして、何故かよそから竹田を訪れている私たちでも、カボス焼酎しょうちゅうの洗礼を受けた千鳥足の道すがら「もしかして今見ている月と同じを江戸時代の武士も見ていたのではないか」と、錯覚してしまうような情景が竹田には残されている。



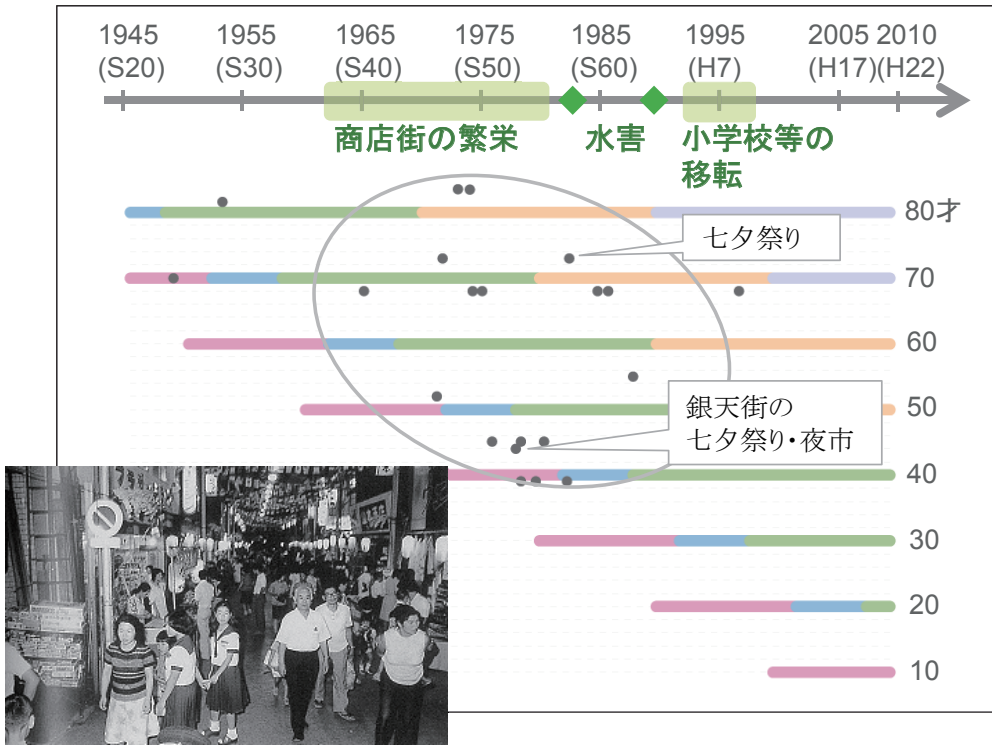


図 3-3 古町の記憶分布図

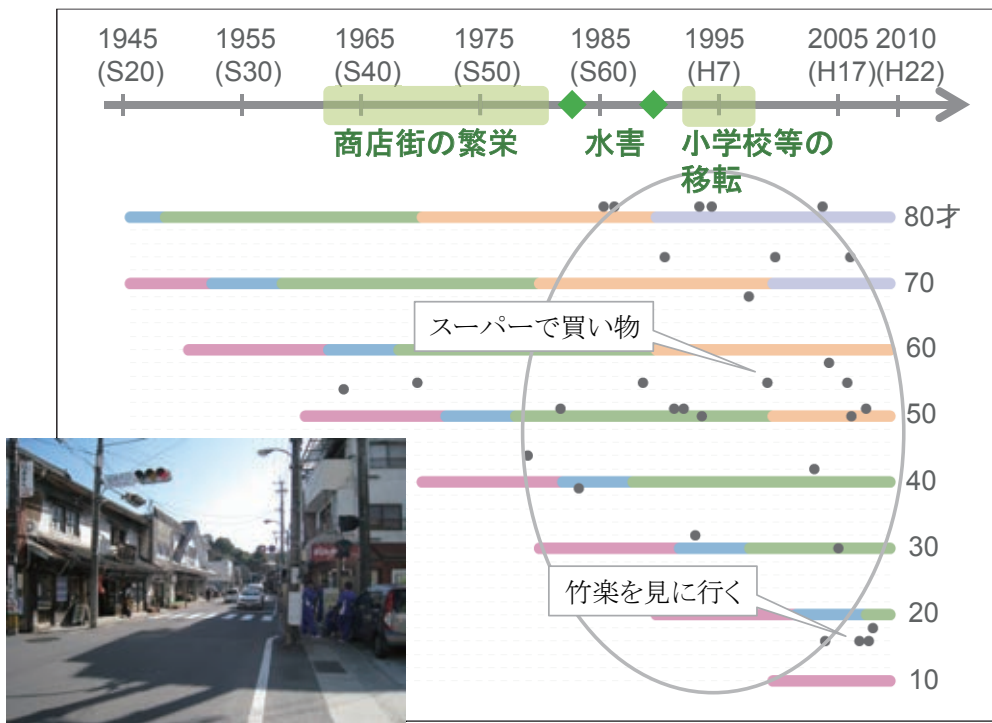


図 3-4 本町の記憶分布図

その理由は、一体何だろうか。

ひとつには、竹田の自然の景観や、町の骨格がさほど変わっていないことがあるだろう。例えば、城下町の住民に対して行った記憶の調査においては、子どもの頃に遊んだ記憶は、世代に関わり無く、城下町の外周り（周縁部の自然）や、中心部の商店での寄り道に集中していた。盆地の中で、外に街区を拡大できなかつた城下町には、変わらない周辺部の自然、中心部の町割りが、いわば記憶の受け皿として残されてきたのだ。もちろんその中で変わってきた事も多い。例えば城下町を襲った度重なる集中豪雨被害と時を同じくして、古町から本町に街の賑わいが移ったという記憶の分布図が示すように、時代によって記憶の場所は移り変わっている。それは小学校の移転、稲葉川の護岸整備という目に見える大きな変化だけでなく、道で遊ぶこどもの姿が減った、1人で過ごすプライベートな時間の比重が増えたという、数々の小さな変化も含んでいる。変わってしまった、そして変わっていく数々の記憶を、地形や町割りという変わらない町の骨格が受け止めている。その骨格、自然の理に従って築かれた線の屈強さが竹田の記憶を支えているのではないか。

また、もうひとつには、自分の育った小さな生活圏の中での、隣人愛ともよぶ、拡大された家族のような感覚がある。「あなたが小さい頃には、こんなことがあった」という個人史を自分の親以外の人間が記述してくれる。その集まりの中での、人と人との繋がり、その関係性の中での自分というものが今も昔も変わらず有り続けている。例えば城下町は、それぞれお宮ごとに区分され、町内にもさらに小さな組という区分がある。その小さな集まりの中で、運動会であつたり、夏越祭りであつたりと、地域の祭りや、生活の情景が今も生き生きと行われている。毎年毎年、

繰り返されていくその年中行事を通して、個人の記憶が地域全体の記憶となっていく。

最後に、城下町ならば商業、農村部は農業と、受け継がれる仕事のなかで、人の気質や、態度、生きる姿勢まで継承されてきたということがあるだろう。城下町であれば、商人の気質である。店先にささやかに下り下げられた花籠、来た人が休めるようにしつらえられたベンチ、通り過ぎる人に爽やかに挨拶をする高校生の声。昔は、七里先から歩いてきた農村の人々に対して向けられていた商人の心は、現在は飛行機で500km先、あるいは遠く海外からやってくる来訪者に向けられている。その心根は、竹田を流れる井路の水のように、時代を超えても変らない水音を響かせている。

言い換えれば、竹田というあるひとつの人格が、幾多の世代の記憶によって、形成されてきたとも言える。そして、その記憶の集積は、これから先も続いて行くだろう。昔を大切にするということは、この瞬間にも、過去になっていく「現在」を大切にすることでもある。「現在」を生きる人々の、日々の生き生きとした情景を積み重ねていくことで、竹田という魅力的な人格は、今後一層、かけがえの無いものになっていくだろう。

(吉武舞)

参考文献

永井友梨：住民に共有される記憶の調査に基づく町の同一性に関する考察

岡本章大：記憶の共有による風景の継承 - オーラルヒストリーを手法として -

竹

新年¹がはじまる

さあ、店先に姫だるま²を投げ入れろ！

今年も商売繁盛いのり

こうとうさま³の初午大祭

神楽奉納^{かぐらほうのう}3日間 天岩戸^{あまのいわと}は開くのか⁴



夜月に桜見、盃交わし

田

三寒四温で 春は朗らか

岡城の桜⁵は 七部咲き

夜月に桜見、盃^か交わし

風



竹 田 に は 月 が 多 い

きぼるはちまん^{きぼるはちまん} なごし^{なごし}
城原八幡 夏越のお下り

いっぺん来ちよくれ よっちよくれ⁶

神様巡るは町の三社 三社祭は盛大に

西ノ宮には 八朔祭り^{ほつさく}

岡神社には ぜじんのさま

神明社の狐面 復活してから十二年⁷

夏の盛りに稲葉川 夜の帳に精霊流し^{しょうろう}

偲^{しの}ぶ灯りは遠くへゆらり 川面に揺れて十七年⁸

中川公の三日月岩 挾^{はさ}田水面の薪能^{かみ}

背後の岡城荒れ果てて 荒城の月が聞こえるよう

城原の夜の暗闇に ぼんやり白い紙垂^{しで}が舞う

荒神様の竹登り 荒面揃^{あらめん}って神楽舞^{かぐら}う⁹

情



澄んだ夜空も極まる霜月

チクラク、チクラク、楽しい響き

竹灯笼に煌めく階段 広瀬神社に続いている

人工照明照らすのは 自在な曲がりの竹細工

竹ほたる¹⁰のおもてなし 十六羅漢^{ろかん}に^{ほの}仄かに瞬く

暮れも近づく師走の駆け音

ほんものの冬がやってくる

祭りの季節も これにて幕引き

月明かりに靴音響く

祭りのお囃子^{はやし} しかとかみしめ

雑踏の余韻に 盃^か交わす

飲み歩けば 下り坂¹¹

竹田の夜に見上げれば いつでも澄んだ月明かり

静かな月に心こめれば まばたきする間に夜明け前



¹ 【歳末には露天商が現れた】「竹田に露店商組合町がいて、各地から集まる商人たち（店を一本・二本とかぞえる）に、事前の警察や保健所の手続きの代行や、場所の割り振りをする（大字竹田山手）が、昔はオヤブンがいて、・・・そのひとりが、竹田を去って死去したホゲサ（布久（ぬの びさし）氏）で、一文饅頭の手さばきと味は忘れられない（下本町、辻組・下組、古町下組）。」－『竹田市史』（1983）下巻 p338 より

² 【姫だるまのオキアガリイレ】360年の歴史を誇る姫だるまは、かつてオキアガリとよばれており、正月に縁起物のオキアガリを家々に放り込んで行くという行事があった。

³ 玉来の扇森稲荷神社のこと

⁴ 神楽の演目に、天岩戸開きというものがある。太陽神アマテラスが岩穴に隠れたという神話に基づく。

⁵ 【名勝の竹田の桜】岡城の桜や銘酒「竹田櫻」 偶然にも、荒城の月の冒頭は「春高樓の花の宴 巡る盃影さして」と、返杯と桜を歌う。竹田の桜は青年会がボランティアで植えていた。桜湯という銭湯があった - ヒアリング資料（阿南孝郎 2012.10.10、橋爪愛子 2012.10.13）より

⁶ 「よっちゃよくれ」という大分弁の歌があり、祭りになると踊りを踊る。このほか、「カボス音頭」という音頭もある。

⁷ 大正初期よりあった行事。各町内18ヶ所の伏見稲荷があり、それぞれの町から子供たちが狐の面を被り、家内安全・商売繁盛を祈願して家を回っていた。近年、35年振りに再興し、2013年は12回目。

⁸ 稲葉川の盆の精霊流しも、近年復活した。

⁹ 【カンジンマイではマレピトが芸能を披露】神楽とは別の話であるが、カンジンマイでは、異郷からのマレピトが家を訪れ、土産や芸能を披露して祝儀を受けるという年中行事もある。

¹⁰ 近年はじまった竹ほたるのイベントでは、河原や広場に竹細工のLED照明を配置。町がやさしい光に包まれる。

¹¹ 【上と下の飲屋街】飲屋街は下町と新町の間、魚新町の横丁と二つあり、さらに田町通り、府内町通り沿いに展開することで、現在は大別して3つの飲屋街が形成されている。バーとスナックの二種類には、場面に応じて絶妙な使い分けがあるようだ。田町通りは「大人の場所」だった。飲み屋やネオン街があった。「うん、この辺（下町通り）はな、それから田町の方も、何軒かあったんだけど、ともかく、うん、あたしたちが小さい頃は、こう、通っちゃいけないって言われるぐらいに飲み屋さんが多かったわ。」 - ヒアリング資料（橋爪愛子 2012.10.13）より



200mのローカリティ

初めてやってきた城下町を、ぐるりと歩く。廻り道しながら右往左往したって、一周するのにほんの一時間。二月後、同じ城下町を、ぐるりと歩く。少し顔見知りも増えて、寄り道する店をいくつか見つけたら、もはやこの町は無敵迷路だ。

広瀬神社の真下のトンネルをくぐって町に入場すれば、田町の赤茶けた舗装が目によさしい。会々トンネルを抜けると、稲葉川の水音に、西光寺の鐘楼¹が城下町の最果てを告げる。竹田の城下町には、これほど多くの顔がある。このことは、おそらく人口の密集ぐあいを反映している。それも商人の町とあり、客を引き込む商店ばかりが並ぶ²。昭和30年～50年、“良い時代”³と、今思えば必ずそのように振り返られる竹田の「全盛期」には、この二万平米あまりの町割の中に、あらゆるものが一つといわずいくつかず⁴共存していたし、未だにその名残を見ることができる。町内の3つの神社は小さな城下町にさらに小さな三分割の陣地を張り⁵、20もの理髪店は細切れの客層を持つ。城下町は、ついにわずか直径200mの生活圏にまで細分化され、この究極のローカリティは町ごと、道ごとに、異なる色を与えている。

道の色は時代をうつろい町をさまよう。小さいという事は、足取り軽やかに移りゆくということでもあるのだ。かつての鍛冶屋街であった下町は飲屋街に変わり⁶、そうかと思えば今度は飲屋街が、下町から田町に移った⁷。昭和38年、古町のバスターミナルが本町に移った⁸ことも、少しずつ通りの性質が巡っていったことを示している。

400年のシンクロニシティ

ここでふと疑問に思う。竹田の「全盛期」とはいったい何だったのだろうか。それこそ江戸時代まで遡ったはるか昔も、「全盛期」も、これからも、城下町に暮らす人々にとってこの町のスケール感是不変だ。いつだって、自分の両手いっぱい広げれば納まってしまうかのような、慎ましやかな家並みを流し見て安堵した。十数の町通りはそれぞれに彩られ、人々は町の中に濃密に暮らしている。

異なる世代の人々にとって、城下町の記憶は少しずつ変っていくが、記憶の背景はいつも同じだ。すこし曲がった町割。建物の擦れた木目。街路を練り歩く祭りの一団。夜には水音響き、瞬く星々。夏はうだるように熱く、冬は時々ひどく冷える夜の町。違う記憶に、同じ背景。竹田が竹田であるということ。身動きが取れないほどに、通りが人で溢れた昭和半ばのとある正月。本町の車通りの騒音を聞き流しながら、まっすぐで少しだけ上り坂になっている通りを、駅に向けてゆったり歩くいつもの帰り道。人は、今も昔も、同じ道の上を歩いている。

竹田の地脈を流れるものたち



城下町の井路

過去、竹田を襲った水害⁹は数知れない。幾度もの水害は町の中心を変化させたこともあった¹⁰。しかし、水は災いをもたらすと同時に、日常の何気ない記憶の中に涼やかにせせらぐ。稲葉川の川面に突き出していた旅館の縁側¹¹、店先の水路¹²に架かっていた橋。その水路に、子どもたちのはしゃぐさま。かつてこの盆地に流れていた二本の小川は、現代の日常に、道の底から水音を響かせる。

もう一つ、竹田に通底しているものがある。中川公が連れてきた藩外の商人たちによって、商業都市竹田が創世されてから400年、竹田は近隣地域の中心として人々を引き寄せてきた。古く江戸時代から竹田に続く家系もある。巡り合わせが重なって、どういうわけかこの町に暮らす人もいる。それでも皆が変らず受け継いできた、竹田の人々の気質¹³が、ここにはある。



銀天街のにぎわい

(李鹿璐)

¹ 西光寺の鐘楼は大分県最古。

² 【最盛期は400近くあった商店が、明治以前は40ほどだった】明治15年頃は719戸のうち419戸が商業を営む。

³ 【中規模建造物がつづけて建てられた】本町バスターミナル(昭和38年)、銀天街(昭和38年)、マート、ニュー竹田(昭和43年)など。すべて現存せず。銀天街にはネオンアーチが掛けられており目立っていた。-ヒアリング資料(小池英明2012.10.18)より。この時代が「良い時代」であったのは竹田に限らず日本全国の傾向であった。子どもの数は日増しに増え、高度経済成長期は町中に活気をもたらした。

⁴ 【銭湯4軒、映画館4軒、理髪店17軒、歯医者4軒】映画館は配給会社による違いがあり、4軒の中で利用者層が分かれていた。理髪店は住民のそれぞれが馴染みの店を持っていた。-ヒアリング資料(後藤武2012.10.13)より
銭湯は内風呂が少ない時代にあった。-ヒアリング資料(橋爪愛子2012.10.13)より

⁵ お宮対抗の運動会があった。

⁶ 馬の蹄鉄を打つための鍛冶屋が昭和20年頃まで並んでいた。モータリゼーションが進み馬車が使われなくなると衰退し、飲屋街へと変化していった。昭和30年代は道路の両側にずらっとお店が並んでいたが、現在はその面影はほぼない。

⁷ 飲屋街の記憶は下町と田町に多いが、同時に栄えたということはなかった。経営者の世代が変わると同時に、飲屋街は下町から田町に変わっていった。

⁸ マルショクととなりあってニュー竹田のビルが作られ、その一階はバスターミナルとして使われた。古町のバスターミナルが本町に移転したことになる。

⁹ 【夏の集中豪雨で洪水被害】近年では、1982年、1990年、2012年と、水害が幾度か竹田を襲っている。

¹⁰ 水害の前後で、古町通から田町通に記憶の中心が移った。

¹¹ 【川沿いに突き出るように建物があった】昭和30~50年のころにはあったが、水害により流されて現存せず。

¹² 井戸水で焼酎を醸造することも。

¹³ 【恵比寿講】今でも商人のまち竹田町では、商売繁盛を祈願する恵比寿講を各講組ごとに行う。

【商売があまりに繁盛したため、町内の人間は遊びの工夫に興じた】江戸時代、年に半分、もしくは一月働けば食べて行けたということで、町民は余暇を楽しむ工夫に精を出していたという。今でも竹田では、老若男女問わず、書や能などの習いが盛んである。

おわりに -月のウサギ-

地域の魅力を伝える

「気持ちは、きちんと言葉にしないと伝わらない。」これは奥の深い言葉である。ただし、人間関係のことではない。地域の魅力のことだ。例えば、初めて訪れるまちがあるとして、私たちは最初、「なんだか歩いていて気持ちのよいまちだ」とか「どことなく懐かしい感じがする」とか、そうした直感的な把握^{はあく}をする。この種の感覚的な理解はとても大切で、何度もまちを体験する中で自分の中に蓄積される感情の層のようなものが、その人にとってのまちの印象を形成してゆく。ただし、そのまちの魅力を説明する時に、同じように自分の感情をそのまま伝えるのでは不十分である。いくら自分自身が熱っぽく気持ちを伝えようと努力しても、おそらくその魅力のすべては相手には伝わらない。地域の魅力を語るときには、「まちの所々にちいさな緑が息づいていて、歩いていて気持ちのよいまちだった」とか「生まれたまちと同じような緑側が散在していて、なんだか懐かしい感じがした」というように、自分の気持ちと同時に、その感情を想起させた何らかの因果関係を伝えることが、「他者に地域の魅力を伝える」ということなのだと思う。

右脳と左脳

人間の頭には、知つての通り右脳と左脳がある。諸説あるようだが、一般に右脳は感情や感性を司り、左脳は論理や思考を司るといわれている。右脳と左脳の両輪のバランスによって、各人は色々な感情を持ち、考え事をする。この二つの脳があることで、人間の精神の複雑な仕組みが実現されるのである。実は、地域の理解にもこの両輪が欠かせない。つまり、地域に関する右脳的理解と左脳的理解の両方が必要なのだ。右脳的理解によって、地域の直感的な印象が形成される。そして、その気づきの中には、地域の魅力の本質な部分が混じり込んでいることがほとんどだ。だから、そうした直感や気づきはとても大切にすべきである。しかし、それを直感のままにしているだけでは伝わりにくい。そうした感情を、より論理的に、構造的に理解する必要がある。なぜなら、論理や構造はより多くの人に複雑な情報を伝搬するための形式だからだ。だから、私たち専門家は、直感的理解の段階から構造的理解の段階へと、徐々に地域の捉え方を移行させてゆくのである。

情感まちづくりと文明論

私たちは、竹田の魅力を情感まちづくり、という感情のニュアンスによって伝えようとしてきた。それはまちの直感的理解を共有するため、そして、まちへの感受性を開くための作業ともいえる。そして、私たちは今、この文明論ノートによって、竹田という地域の構造的な理解の段階へと移行しようとしている。この冊子は、竹田において直感的に把握した魅力を、文明論という切り口からより構造的に理解しようとするものだ。竹田に息づく情感の背後には「水と地形の秩序に由来する生きているシステム」、「手のあとが重なる空間」、「受け継がれる竹田の人格」という見えない体系があると私たちは考えている。これは、私たちが4年半にわたり竹田に通い続けた中で獲得してきた数々の直感の構造的整理、つまり左脳的理解の方法だともいえる。

地域の立体的な理解のために

右脳と左脳の例えをしたが、脳科学の知見によると、脳の働きと視覚の働きは密接な関連があるようだ。あえていう必要もないが、一般に人間には2つの目があり、その視線の角度の違いによって対象を立体的に把握できる能力が備わっている。そして、対象を立体的に把握できると、その裏側の見えない部分を想像することができるようになる。例えば、月の裏側にはウサギが住んでいる、というのも見えない部分への想像力の産物だろう。つまり、物事を立体的に理解することによって、未知のもの（つまり未来）への想像力が生まれると言ってもよい。いま、私たちは竹田に関する右脳的理解と左脳的理解を獲得しようとしている。そのどちらが優れているというわけではなく、そのどちらが高度であるというわけでもない。竹田に関する2つの視線を有することによって、はじめて竹田という地域を立体的に理解することができるようになるのであり、その先の未来への想像力が生まれるのである。

あなたは、竹田にいるかもしれない、月のウサギを見ることができるだろうか。

竹田市における東大の研究活動の系譜

2009 年度

- 6 竹田市首藤市長、東大景観研来訪
- 8 東大景観研による白水ダム／城下町調査
- 10 井路／棚田調査
白水ダム周辺整備へのデザイン提案

論文成果

- (卒論) 金井雄太：近世竹田における城下町設計の論理
- (卒論) 籠橋敦志：大分県竹田市における井路の現況調査と特徴分析

2010 年度（受託研究 1 年目）

- 10 白水ダム周辺整備第一号プロジェクト鴨田駐車場・トイレの竣工
- 10 吉川屋さんを借りて一週間の城下町調査
- 2011. 3 「竹田城下町ノート」作成

論文成果

- (博論) 山田裕貴：竹田における農村景観の近代の変容と多層的共同体の関係性
- (修論) 亀田佳明：城下町竹田における街区内部の利用と変遷
- (卒論) 永井友梨：住民に共有される記憶の調査に基づく町の同一性に関する考察

2011 年度（受託研究 2 年目）

- 5 城下町再生フォーラムにて「竹田情感まちづくり」構想提案
- 11 鴨田駐車場・トイレのグッドデザイン賞受賞祝賀会
- 2012. 2 城下町再生シンポジウムにて図書館のあり方などを提案

2012 年度（受託研究 3 年目）

- 10-11 志土知地区にて生活と風景に関するオーラルヒストリー調査（景観研究室）
- 10 城下町下本町においてオーラルヒストリー調査（川添研究室）
- 2013. 3 志土知地区公民館にて景観研究室研究報告会
- 2013. 3 下本町寄合所「よろうえ」オープン・川添研究報告会

論文成果

- (卒論) 竹本福子：農村集落における風景と生活史の変遷 - 大分県竹田市志土知地区を対象として -
- (学会発表) 岡本章大：記憶の共有による風景の継承 - オーラルヒストリーを手法として -

2013 年度（受託研究 4 年目）

- 2014. 2 「竹田文明論ノート」作成
- 2014. 3 「竹田好いちゃん博覧会」にて成果発表

周辺活動とできごと

研究を通してたくさんの方々と出会い、そして、そのつながりが研究以外への様々な活動にも派生、展開していきました。竹田の紡ぐご縁を、今後も大切にしていきたいと思っています。

2010.1 広報たけたに竹田雑感の寄稿スタート

2010.3 農業土木遺産を活かしたまちづくりフォーラム



→ 2011.4 鳴田森家の田植えに参加

→ eauによるエコミュージアムの取組み

2011.11 Taketa Art Culture で
竹田在住のアーティスト達と出会う

2012.3
竹田エコミュージアムシンポジウム

2012.4 在京若手竹田出身者と東大にて懇親会

2012.5
鳴田森家でイーネカルチャー開催

2012.7 九州北部豪雨 ---> 2012.11 竹楽にてチア竹屋台



2013.12 城下町再生プロジェクト委員会に
中井祐教授が参画

→ 2012.3 竹田好いちよん博覧会

2014.4 竹田雑感完結（全51回）

| 執筆者

中井祐 (東京大学景観研究室 教授)

福島秀哉 (東京大学景観研究室 助教)

山田祐貴 (東京大学景観研究室から、現在(有)イー・エー・ユー所属)

高橋朋子 (東京大学景観研究室修士2年)

川添善行 (東京大学川添研究室 講師)

吉武舞 (東京大学川添研究室 特任研究員)

李鹿璐 (東京大学川添研究室から、現在他大学に所属)

| 制作協力者

浅井淳平 (東京大学景観研究室修士1年)

岡本章大 (東京大学川添研究室修士2年)

永井友梨 (東京大学景観研究室から、現在東京都勤務)

金井雄太 (東京大学景観研究室から、現在鉄道会社勤務)

| 写真撮影

P8 / 10 中 / 11 / 31 左上 山田裕貴

P9 上 / 10 下 高橋朋子

P9 中 / 31 左下 景観研究室

p9 下 竹田市提供

P16 / 18 / 24 下 / 26 吉武舞

P19 / 25 上 / 27 上 李鹿璐

P20 岡本章大

P22 下 永井友梨

P24 上 / 25 下 / 31 右下 鈴木和宏

P31 右上 (有)イー・エー・ユー

その他記載なきものは竹田市制施行50周年記念誌「竹蔵」掲載写真を使用。

| 参考文献

竹田市誌, 1983

竹田市制施行50周年記念誌「竹蔵」, 2004.10